
結婚狂奏曲

松宮星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

結婚狂奏曲

【Nコード】

N0037X

【作者名】

松宮星

【あらすじ】

スレイヤーズです！ TRYまでの設定で作った話です！ 俺の名はゼルガデイス。残酷な魔剣士と恐れられ、醜い異形を蔑まれる、孤独な永遠の旅人……だったはずなのだが、セイルーンに着いた俺は何故か結婚騒動に巻き込まれた。しかも、相手は……アメリカ？ 2003年8月に友人に一度、同人誌で出していた話です。ちよつとだけ書き直しますが、ほぼ一緒です。

おまえらヒトの話を聞け！（前書き）

アニメ版設定なので、アメリカはリナに敬語を使っております。
でも、原作のクロフェル侯がご出演なさっております。好きなんです……忠義のおじい様。

おまえらヒトの話を聞け！

俺の名はゼルガデイス^二グレイワーズ。魔剣士だ。

強さを求めるあまり、赤法師レゾの魔法によって、^{ロック・ゴーレム}岩石人間と邪^{ウィ・デーモン}妖精との合成人間にされてしまった愚かな男だ。

レゾの死を見届けた後、俺は、一人、世界を彷徨っている。自分を人間に戻す方法を求めて……

『^{クレア・バイブル}異界黙示録』、外の世界の遺跡、^{ダークスター}異界の王との戦い……さまざま

な経験を重ねてきたが、どこにも俺を人間に戻す方法はなかった。

ある者いわく……おいしいミックスジューズは作れても、その中からオレンジジューズだけを取り出す方法はない。

俺の体を直す秘術など、存在しないのかもしれない。

だが、それでも、俺は……

わずかな希望を胸に、荒野を彷徨い続ける。

俺の名はゼルガデイス。残酷な魔剣士と恐れられ、醜い異形を蔑まれる、孤独な永遠の旅人だ……

……だつたはずだ。

……少なくとも、昨日までは。

……いや、少なくとも、数時間前までは。

「いやあ、めでたい、めでたい、めでたいのう。ついに、わしのかわいいアメリカも花嫁さんか……くううつつ、泣けるのー」

「アメリカさま、じいは……じいは……嬉しゅうございますうう。亡くなったお母様に代わり、不肖このクロフェル、アメリカ様を陰

ながらお守り続けてはや十数年……老体に鞭うちご奉公を続けた甲斐がありました！　アメリカ様の花嫁姿が見られるとは！」

「ねえ、アメリカ、セイルーンの王族の結婚式ってどんななの？」

「まずは、赤の竜神スライドの神殿での神前結婚式です。他国の代表も列席されますが、形式上、内々の式となってるので、その後、セイルン・シテイをパレードしたり、舞踏会を開いたり、晩餐会をしたりしてしっかりお披露目しなきゃいけません」

「お色直し、合計、何回？」

「えっと……。何回だっけ、じい？」

「アメリカ様は第二王位継承者でございますから、二十数年前の陛下の結婚式よりも略式でよろしいかと……。パレード一回、園遊会一回、舞踏会と晩餐会を三日でいかがでしょう？」

「んじゃ、神前結婚式と合わせて、九着はドレス着られるのね。いーなー、さつすが、腐っても王族」

「……腐ってませんよ、リナさん」

「いいわよねー、アメリカ。ゼルなら式の真っ最中に居眠りなんかしないもんね。あたしの時は、うちのクラゲのせいで式はメチャクチャ……結局、お色直しの真紅のドレス、着られなかったし……はー」

「式をメチャクチャにしたのは、リナさんでしょ？　普通、花嫁さんは、炸裂弾ディル・ブランドうちませんよ」

「あー！　そーは言うけどねー、そもそも……」

「クロフ、各国への案内状はどうなってる？」

「ゼルガディス様のおいでと同時に、準備を始めました。今、書記八人が三百通を書き上げている最中です。後ほど、ご署名をお願いいたします」

「うむ。式は来月十日の吉日。おお、もう一ヶ月もないのか！　こりゃ、いかん。グレイシアへ密使を放たねば。あやつ、式までにセイルーンに帰ってこられるかのう」

「……いささか、難しいかと」

「まあまったく、困った奴だのー、だつはっはっはっは！」

以上の会話は、フィリオネル国王（俺がセイルーンによりつかなかった五年の間に、万年王子だったこのおっさんは国王に即位していたのだ）、国王の側近クロフェル侯、美人奥様魔道士に自称を変えたりナ、そしてアメリカとの間で交わされたものだ。

こいつらは……

アメリカの結婚式の話をしているのだが……

どーいうわけか

その相手は、俺、と、いうことになっている。

むろん、俺も黙って話を聞いていたわけではない。

『おい』とか、『こら』とか、『何の話だ』とか、果ては『ヒトの話を聞け！』と怒鳴ったのだが……ことごとく無視されてしまっている。

そもその間違いは、セイルーンに立ち寄ったことだ。

いや、セイルーン・シティに足を踏み入れたとしても、王宮に顔を出さなきゃ良かったんだ。

五年前の勧誘なんぞ思い出さず、さっさとセイルーンを離れていれば……こんな事にはならなかった筈だ。

王宮を訪れた俺は、何故か、国賓用の応接室に通された……。

そこで何か変だと思ふべきだった。怪しいと思って逃げるべきだったのだ。くそお。

応接室に現われたのは、アメリカだった。多少、背は伸びた（よくな気もする）が、あいかわらず童顔で、元気一杯。二十歳を越えたはずだし巫女装束だったが、十二才の子供でゝすと言っても通りそうな容姿だ。

「ゼルガデイスさん！」

アメリカは猛ダッシュし、俺に飛びついてきた。

「ついに！ ついに、来てくれたんですね！ ゼルガデイスさん！

わたし、嬉しいですよ！」

ダークスター

闇を撒くものとの戦いの時、俺はアメリカに『すべてが終わったら、セイルーンに来てくれますか？』と、誘われた。

その場では『考えとく』とは答えたものの、その後、人間に戻る方法を求めて俺は旅に出してしまった。

セイルーンに行ったところで、無駄足となるからだ。セイルーンには俺を救う秘術はない。既に調査済みなのだ。レゾの下を離れた俺が真つ先に足を向けたのが、白魔術都市だったのだ。

調べるべきものも特にないし、アメリカの薦めとはいえ仕官をする気もなかった。だから、ずっとセイルーンに寄りつかなかったんだが……

たまたま近くに用事があったので、ついでに王宮に挨拶に来たのだ。五年前の話とはいえ、返事を保留にしているのは気分が悪い。だから、きちんと仕官の件を断ろうとした。

が、それよりも早く、アメリカがこう言ったのだ。

「ゼルガデイスさん！ わたし、絶対、いいお嫁さんになります！ 愛と正義の名にかけて！」

へ？

と、硬直した俺。

その周りを、いつの間に現われたのか、フィリオネル国王、クロフェル侯、リナが取り囲み、勝手に結婚話を進めている、というわけだ。

一体、何がどうなってるんだ〜

「ゼル」

ん？

「おおーい、ゼル、こっち、こっち」

背後からの声に振り向けば、扉の所に覚えのある顔が一つ。

「ガウリイ」

自称リナの保護者……四年前、リナを嫁に迎え、名実ともに真の保護者となった凄腕の剣士だ。

ガウリイは廊下から顔と手だけを覗かせながら、こっちに来いと俺を手招きした。

俺は周囲に視線をめぐらせた。どいつもこいつも派手に盛り上がって話に花を咲かせている。

……俺が消えても、気づかんだろう。

気配を消して素早く廊下に出て、いまましい応接室の扉を閉めた。

「よ！ ゼル！ 久しぶり！」

「おまえとリナの結婚式以来だから、四年ぶりだな」

おや？

ガウリイは左肩に、小さな女の子をのせていた。三つぐらいか？

栗色の髪で、こぼれそうなほど大きな瞳をキラキラ輝かせている。

「その子は？」

「ラナだ。ラナちゃん、とーさんの友達のゼルガディスのおじちゃんだ。ごあいさつして」

「こんにちはー」

ガウリイの肩の上で女の子は、ニコーツと笑った。

青黒い岩の肌、銀色の金属質の髪の俺を見ても、まったくものおじしていない。この度胸のすわったところといい、見た目といい、

母親そっくりだ。

「はじめまして」

と、子供相手なので声色を少しやわらかいものにして、尋ねた。

「幾つだ？」

ちびリナは、指を三本、びしいっ！ と立てた。

俺は視線をガウリイに向けた。

「リナそっくりだな」

「だろー。もー、かわいくって、かわいくって」

ガウリイは顔中をでれでれにしている。

親バカ、め。

「おまえらセイルーンに引越して来たのか？」

「いや、そういうわけじゃないんだが」

ちびリナをあやししながら、ガウリイは言う。

「今年になってから、家が十回も潰れちまってな」

……は？

「セイルーンの王宮なら丈夫だから、先月から居候させてもらってるんだ」

「……あいかかわらず、派手な生活を送っているようだな」

「いやあ、それほどでも」

褒めとらん、褒めとらん。

「それに、ここだとラナちゃんのお勉強にちょうどいいんだと」

「お勉強？ 三才の子供に勉強させてるのか？」

「ああ。リナが早い方がいいって」

……意外だな、あのリナが教育ママとは。

「何の勉強をしてるんだ？」

「うーんと」

ガウリイは首をかしげ、左肩の上の娘に尋ねた。

「なんだっけ？」

「ラナちゃん、わかんない」

「うーん、今日もリナに課題もらって勉強してたんだが、ラナちゃ

んがあきちゃってな、散歩してたんだ」

「何の課題だ？」

「えっと」

ガウリイは、又も、左肩の上の娘に尋ねた。

「なんだっけ？」

「ラナちゃん、わかんない」

「おとーさんも、だ」

二人は顔をあわせ、わっはっはっはと明るく笑った。

こいつら……

中身、そっくりじゃないか……

外見リナで、中身がガウリイな女の子なんて……^{すえ}末恐ろしすぎる

……

「それは、そうと」

ガウリイは、脳天気 to 笑った。

「結婚、決まったんだってな、おめでと」

ぶっ！

「結婚式だ、披露宴だ、親戚回りだ、いろいろ大変だが、頑張ってくれ。あ、そうだ、一つ忠告しておくが、めんどーでも、アメリカの希望はできるだけ聞いてやれよ。ほら、オレさー、めんどーなの嫌いだろ？ 退屈な話ずーっと聞くのやだってゴネて、お色直しの回数を減らしてもらって、式の時間も短縮してもらったんだが……うっかり居眠りしちゃったろ？ リナの奴、ずーっと怒ってるんだ。何かつてえと『結婚式の時、寝たでしょ、あんた』って怒鳴るんだよ。だからさ、一生一度のことなんだし……死んだ気になってカミさんのいう事聞いてやれよ、ゼル」

「ちがーっ！」

「へ？ なにが？」

「俺に結婚の意志などない！」

「え？ そうなのか？」

「当たり前だ！ もとの体に戻っていないのに、そんな悠長なこと

やってられるか！」

「そのまんまでも、アメリカは気にせんと思っぞ」

「フン！……くだらん」

俺はそっぽを向いた。

俺とアメリカが結婚だと？

そんな馬鹿なことありえん。

「第一……ああ見えても、アメリカは王族だ。どこの馬の骨ともしれん俺とでは、釣り合わんだろう」

「ああ、そりや大丈夫だ。なにしろ、ゼルはセイルーンじゃ四英雄だから」

……はい？

「四英雄……？」

「ゼルと、オレとリナ、アメリカが四英雄だ。ほら、前に、フィルさんの命が狙われたことがあつたろう？ あの時、ほら、魔族の……

……なんとかつての、えっと」

「カンツェルとマゼンダか？」

「そー、そー、そいつらから、セイルーンを守ったから四英雄なんだそーだ」

「……あの時、リナ、セイルーン・シティの三分の一ぐらいを竜破^{ドラグ・スレイブ}斬でぶっ壊してなかったか？」

「そーいや、そーだったかも」

あっ軽くガウリイが笑う。

忘れるなよ、それぐらい……

「ま、なににせよ、ゼルは四英雄だ。セイルーン・シティの広場にオレ達の銅像があるし、国を救った英雄とお姫さんの結婚なら国中が祝福してくれるさ」

「あのな」

俺は叫んだ。

「結婚する気はないと言ってるだろーが！」

「でも、プロポーズOKしたんだろ？」

「知らん！ 何の話だ！」

「おつかしーなー、たしか、リナが」

「ガウリイ、ラナ」

冷やかな声かけられた。いつの間にか、応接室の扉が開いている。

「なにしてんの、こんな所で？」

扉を閉め、廊下に出てきたのはリナだった。

ガウリイはわるびれた風もなく答えた。

「お散歩だ。ついでに、ラナちゃんをゼルに会わせてやろうと思つて、な」

「……で、挨拶は済んだんでしょ？」

「ああ」

「じゃ、部屋に戻つて、勉強して」

「え——っ！」

ちびリナは抗議の声をあげた。が、母親の一睨みでシュンと黙つた。やはり怖いのか、リナが。

「戻るのはいいんだけどさ、リナ」

一方ガウリイの方は、おどろおどろ線をしょつてるリナに、まったく動じていないようだ。

「お勉強つて……なにやるんだっけ？」

「ピキイイイ！」

と、リナの頬がひきつったのがわかった。

「『焚き火があります。めらめら燃えてます。消すにはどうすればいいでしょう？』よ！ 消す方法をイメージ・トレーニングするの！」

「お——」

「お——」

父娘はポンと手を叩いた。そうだったかつ！ てな感じで。

「課題忘れたら、テーブルの上と両壁と、ドアを見なさいって言うたでしょ！ 張り紙がしてあるわよ！」

「お——」

「お——」

父娘はポンと手を叩いた。

ほんの少しだが……リナが気の毒に思えてきた。

「わかったら、ちゃっちゃんと帰る！　できるまで夕飯は抜きだからね、ラナ！」

「はい」

「じゃ、また、後でな、ゼル」

ガウリイは娘を肩にのせたまま、背を向けて歩き出した。

「おとーさん、焚き火は、どーやって消すんだっけ？」

「土かけて、踏んづけりゃいいんだよ」

「そっかー」

「ちーがーうつ！　エクスト・ボール消化弾よ！　アクア・クリエイト浄結水でもモス・ヴァリウム誘蛾弾でもいいの！

教えたでしょーが！」

リナは二人の背に向かって叫んだ。が、果たして、大ボケ親子の耳に届いているのかどうか……

「……たいした教育ママぶりだな」

むろん、皮肉だ。

「しょーがないわよ」

リナは前髪をパサツと払った。

「あの子、中身はガウリイなくせに、魔力はあたしの子供時代より強いんだもん」

げっ！

「魔力を暴発させて家を壊したのも、今年になってからもう七回よ！　しっかりコントロールできるようにならなきゃ、危なっかしくって人里に置いとけないわ」

なるほど。それで、街自体の結界によって、攻撃魔法の威力が落ちるセイルーンで修行させているのか。

ん？

魔力暴発でラナが家を壊したのは、七回？

十回じゃないのか？

今年になつてから十回、家が壊れたとガウリイは言っていた。

旦那が数を間違えたのか、残りの三回、家を壊したのはラナではなく……

やめよう。つまらん事を口にして、いらん騒動を起こすのも馬鹿らしい。

晴れて自由の身になる為に

「ゼル、あんた達の話、ちょっとだけ聞こえたんだけど……あんた、アメリカのプロポーズにOKした覚えがないって言ってたわよね？」

「ああ、ない」

あつてたまるか、そんなもの。

「俺は、ただ、五年前の仕官の件を断ろうと思って、セイルーンに来ただけだ」

「仕官の件？」

ダークスター

「闇を撒くものとの戦いの最中、誘われたんだ。全てが終わったら、セイルーンに来て欲しいと、な」

「……………」

「フィル陛下は名君だろうとは思うが、宮仕えなど性に合わん。第一、まだもとの体に戻っていない。アメリカからのせつかくの誘いだ、俺は」

「……ゼル、あんたって」

リナはジト目で俺を睨んでいた。

「ガウリイなみに鈍かったのね」

「……………」

なにい！ ガウリイなみだと！ 侮辱にしてもほどがある！ この俺がガウリイなみに鈍いだとお！

「言つて悪いか！ トーヘンボク！ 生きるか死ぬかの瀬戸際で、乙女がスカウトに燃えるわけないでしょ！」

へ？

「セイルーンに来てください」イコール「セイルーンと一緒に暮らしてください」イコール「結婚してください、よ！」

！！！！！！

そっ……そうだったのか……

「女の子が一大決心をしてプロポーズしたつてのに、あんた、返事保留のまんま消えちゃったでしょ？ それだけでも、乙女の純情をふみにじる行為！ 極刑に値するわ！ あたし、四年前の結婚式の時、再会したあんたに竜破斬ドラッグ・スレイブたたきこんでやるうかと思ったんだから。アメリカに止められたからやめたけど」

「……アメリカは何と？」

「『まだゼルガデイスさんにとって、全てが終わってないんだと思います。人間に戻るか、でなきゃ今の姿のまま生きていこうって心の整理がつかしたら、きつと……ゼルガデイスさん、セイルーンに来てくれます。いつゼルガデイスさんが来ても笑って迎えられように、わたし、セイルーンで待ってます』と、こうよ！ 泣かせる話じゃない！ 思い立ったら一直線の突撃どどんぱ娘のアメリカが、この五年間、ひたすら、あんたを待ち続けたのよ！」

「……………」

リナの体から黒い魔力の気が、殺気と共にゆらめきのぼった。

「仕官うんぬんの誤解……アメリカに言ったら……許さないわよ」
うっ！

「あんたが、いつセイルーンに来てでもいいように、四年間、あたしも協力してきたんだから」

「……協力って……？」

「ビジネス抜きでやったのは、フィルさんの説得と、アメリカへの励まし。その後、フィルさんからの依頼で、四英雄の話の流布及び銅像制作の指示なんかもしたわね」

「それだ！ その四英雄とかいう恥ずかしいのは何なんだ？」

「あんたの価値を高める為の方便よ」

「なんで、そんな事を？」

「フィルさんの親心ってヤツ。アメリカのおかーさん、つまりフィ

ルさんの亡くなった奥さんって、一介の女魔道士だったんですって。だもんだから、結婚前、身分違いやなんだって、親族とか家臣が、か・な・りブーブー言ったらしいのよ。フィルさんはあのとーりの性格だから、持ち前の正義パワーで高いハードルを乗り越えたらしいんだけど、同じ苦勞をかわいい娘にはさせたくないんだって」

「なら……俺以外の奴を花婿にすればいい」

「まったくもってその通り。でも、アメリカが惚れたのはあんなんだから、しょーがないじゃない」

惚れた……？

アメリカが俺に……？

いや、だが、しかし……

「しっ、……しかし、だな、リナ」

「それから、あんたが現われたら、さっさと結婚話を進めるとフィルさんに助言したのも、あたし。ゼルガデイスはとーっても憤み深い恥ずかしがり屋さんだから、王家に遠慮して身を引こうとするに決まっていますって」

「……だーれが、恥ずかしがり屋さん、だ」

「あんた」

「おい」

「いかん！ このままでは、うやむやのうちに結婚させられてしま
う！」

「結婚するかしないかは、俺が決める！ いや、結婚などせん！

それどころじゃないんだ、俺は！」

「もとの姿に戻る方法を探すのに忙しい？」

「そうだ！」

「それって、結婚しててもできるんじゃない？」

んっ？

「それどころか、セイルーンの国力や情報力が利用できるようになるのよ。一人でセコセコ調べまわるよりも、絶対、効率がよくなるわよ」

それは……そうかも。いや、そんな！

「これは俺の心の問題だっ！ レゾの爪痕も消えんうちに結婚なんぞ……そんなのききな真似、する気分にはなれん！」

リナはジーツと俺を見つめている。

「……じゃ、あんた、アメリカが嫌いなのか？」

「……」

俺はそっぽを向いた。

「それとこれとは、別問題だ」

「同じよ」

リナはポンと俺の肩を叩いた。

「つまらない意地はると、幸せを逃がすわよ」

「……幸福など、もともと俺には無縁のものだ」

「ふーんだ、ガキ」

視線を合わせると、リナはベーツと舌を出した。

「なににせよ！ あんたには結婚以外の道はないのよ！ セイルーに姿を見せた以上、プロポーズにOKしたってことなんだから！ 逃げたら……わかってるでしょーけど、何処に隠れてても必ず見つけ出して、たっぷりお仕置きした後、ふんじばって連れ戻してあげるわ！」

言いたいことだけ言って、リナは応接室に戻って行った。

あのリナが本気になったら……その上、ガウリイというオプションまでついて来たら……俺一人では、絶対に、かなわん。

逃げても、捕まるだけだ。

だが、このままでは、俺の意思など黙殺されたまま……結婚させられてしまう……

アメリカと……結婚……

いやいやいや！ ありえん！

というか、そんな事してる場合じゃないんだ、俺は！

「おまえか？ ゼルガディスとかいう馬の骨は？」

背後から、偉そうな声がかかった。

声の主は二十代後半ぐらいのなまっちょろい男だった。お供を二人連れてくる。黒髪、青の目……どっかの誰かの面影がある。誰に似てるんだ？

「ほう、なるほど、これはバケモノだ。岩のような肌に、尖った針のような銀髪……こんなモンスターが誇り高きセイルン王家に入るとは、ね」

思い出した、アルフレッドだ。王位に目がくらんで、フィル王子（当時）の暗殺をたくらみ、魔族に利用されたあげく殺された、アメリカの従兄弟。アルフレッドに似てるんだ。だが、こいつの方が顔に品がなく、唇がだらしない。

「アメリカ姫も、まったく物好き。人外の魔物のどこがいいんだか……なあ、おまえ、どんな手を使って姫をたぶらかしたんだ？」
ふーん。

やはり、何処にでも居るものだ、バカは。

並みの頭脳があれば、国王の娘の花嫁候補を正面きって侮辱したところで利なしと、わかりそうなものだが……優等人種論に染まった血統賛美主義、王族万歳の王室育ち、世間の荒波に縁の無いボンボンですと、名乗っているようなものだ。

「答えるよ、下民！ この僕を誰だと思って」

「ローエン」

咎めるような声がかかった（しかし、人通りが多い廊下だ、ここは）。

「クリストファー様！」

ボンボンは慌てて礼をとった。

現われたのは、フィル陛下の弟のクリストファーだった。

「廊下で声を荒げるなど見苦しいぞ」

「はっ、すみません」

ボンボンはそそくさと部下を連れて、引き上げて行った。

クリストファーは軽く嘆息すると、静かな笑みを俺に向けた。

「いつぞやは、たいへんご迷惑をおかけした。あらためて謝罪いた

す」

「……………」

「本来、四英雄の前に顔を出せる立場にはないのだが、甥のあまりに情けない声が漏れ聞こえ、つい、さしでがましい口を出してしまった。申し訳ない、ゼルガデイス殿」

甥……………か。似ているわけだ、アルフレッドに。

クリストファーの笑みが苦いものに変わっていた。

「何時の世も、王冠に近い者は、つまらぬ夢を抱きやすいもの。王冠など手にしなくとも、真の幸福は手に入れられるのだと……………早くあれも気づけばよいのだが」

「……………」

重みのある言葉だ。クリストファーが王位に執着したせいで、親父を見て育ったアルフレッドの根性が曲がり、あげくアルフレッドは魔族に殺されたのだから。

王位継承権を放棄し、今は、神官の真似ごとをして暮らしているのだと、クリストファーは己のことをポツポツと語った。

……………ふむ。

「さっきの、あのローエンという男、何番目の王位継承候補なんだ？」

「ローエンか？ 第八候補だが？」

……………めちやくちゃ遠いじゃないか。

それが何か？ と、聞いたそんなクリストファーに、きちんと話して親睦を深めたいと答えた。

他人の話聞ける人物ではないと、クリストファーはしぶったが、最後にはローエンの住む離宮の場所を教えてくれた。

そう、あのテの奴とは……………

是非とも、親睦を深めたい……………

バカはいい……

わざとバカの前に顔を出しすところばせて恥をかかせただけで、
暗殺者アサシンまで送ってくれる。

その暗殺者アサシンをふんじばり、離宮までおしかけて、バカの前に転がしてやった。腰を抜かして、あわてふためくバカ。実に愉快だ。

「この程度の奴じゃ、俺の足元にも及ばん。こいつに比べれば、×の警備兵や●●の騎士団の方がまだマシだ」

と、捨て台詞を残して、俺は引き上げた。

その後、物陰に潜んで聞き耳をたてていると、バカは××国や●

●●国に密偵を放ち、俺について調べると命令していた。

本当に……バカはいい。

こっちの思い通りに動いてくれる。

あの辺りじゃ、俺は指名手配犯だ。昔、レゾの下にいた頃、いろいろと悪どいことをしたからな。

俺はセイルーン王家にふさわしくない男だと、ほっといても、あのバカが情報を集め、大々的に宣伝してくれる。

これで、この馬鹿な結婚騒動も終わりだ。

フツ、晴れて俺は自由の身だ。

裏庭に出てから、思いつき高笑いをした。

ざまーみる、だ。

「ゼル」

リナだ。凄い顔で、俺を睨んでいる。

「あんた……一体、なにを考えてるの？」

「言わんでも、わかってるだろ？」

俺はニヤツと笑った。

「俺はアメリカには真実は告げん。逃げも隠れもせん。だが、結婚は白紙に戻る。周囲が勝手に結婚話をぶち壊すのなら、止めようもないだろ？」

「それでいいの？」

「むろんだ」

「ふーん、そう」

リナは瞼を閉じ、腕組みをした。

「ローエンの狙いが、アメリアの花婿の座でも？」

……なに？

「あの二人は従兄弟だろ？」

「違うわ。ローエンはアルフレッドの母方の血筋よ。先々代の血を引いてるから、アメリアとも縁はあるけど、血が薄いから充分、花婿候補らしいわよ」

だ、だが……

「あのバカが花婿じゃ、アメリアの方から断るだろ？」

「アメリア本人はやだろーけど、王族としての判断つてのもあるわ」
リナはキツ！ と、瞳を開いた。

「今、フィルさんにもしもの事があつたら、王位を継ぐのはアメリアだって言われているわ。なんでも、アメリアのおねーさんのグレイシアさんって、ものすごい方向音痴で、フィルさんの訃報を聞いてもセイルーンに辿り着ける確率は限りなくゼロに近いそうよ。つまり、アメリアと結婚する者が王冠に最も近い者ってわけ。だから、ローエンは、あんた達の結婚を邪魔しようとしてるのよ」

そうだったのか……あのバカは。

「王位を継いだら未婚ってわけにもいかないでしょ？ 世継ぎつくらなきゃいけないから。ローエンはパスできたとしても、誰でもいいからそれなりの身分の奴とアメリアは結婚しなきゃいけないの」

「……………」

「あんたがいったって、あの子が言うから……あたしもいろいろ協力したけど……ここまで、ね。あんたが自分の手で二人の幸せをぶち壊したんだから！」

リナは、くるっときびすを返し、俺の前から姿を消した。

「見てください、ゼルガデイスさん！　きれいなブーケでしょ？
それに、ほら、この真っ白なドレス！　くるくる回ると裾がふわ
と広がるんです。シルフみたいでしょ？」

アメリカは無邪気に、仮縫い中の花嫁衣裳を見せる。

少し……良心が痛んだ。

「アメリカ……ローエンのこと、どう思う？」

「ローエン……ああ、あのヒト、使えないですよね」

アメリカは苦笑いを浮かべた。

「純粹培養の王族って、時々、ああいうタイプができちゃうんです
よ。まったく、困ったもんです。いい年して、あのヒト、まともな
職に就いたことないんですよ。勉強もダメだし」

「その……」

「あー、そうだ、リナさん、知りません？」

「リナ？」

「リナさん、何処にもいないんです。ガウリイさんもラナちゃんも、
です。まだラナちゃんの修行が終わってないから、セイルーンから
出て行くはずないんだけど」

リナが居なくなった……？

俺のせい……か。俺が馬鹿すぎるので、厭きたのか……

いや、きつと、アメリカが不幸になる姿を見たくなかったんだな。
アメリカは次々と式用のドレスを見せてくれる。

俺は上の空だった。アメリカがこの幸福に酔えるのは、後わずかな
時間だ。

俺は犯罪者としてセイルーンを追われるか、他国に引き渡される
……ともかく、花婿候補ではなくなる。

俺は……アメリカを裏切ったのだ。

事故にみせかけて、ローエンを始末するか？　悪事から手を引い
た俺だが、アメリカの為なら……

だが、王位を狙ってアメリカによこしまな欲望を抱く者は、あのバカ一人ではないのだ。

品行方正で、性格が良く、顔も学業も武術も優れた者でなければ、アメリカにはふさわしくない。それ以外の奴がアメリカに近づくと許せん。

セイルーンにとどまって地下に潜り、マシな花婿候補が現われるまでカス候補どもを暗殺し続けるか……本気でそうしようかと悩んでいた時、ノックが響き、廊下から声がかかった。

「フィリオル陛下のお召しです。ゼルガデイス様、御前会議にご出席ください」

……きたか。

俺とアメリカの甘い夢も……ここまでだ。

アメリカはアメリカらしく

バカは鬼の首でもとったような得意そうな顔で、会議の卓の末席に座っていた。王族のくせに、その位置か。無役の証拠だな。

バカは××国から取り寄せた俺の指名手配書をバツ！と開き、フィル国王、その横のアメリカ、卓につく大臣達に見せつけた。

「ゼルガデイスⅡグレイワーズなる男は××国で、放火、強盗、恐喝、傷害、騒乱、建築物破壊等の罪に問われている極悪な犯罪人です。●●国でも同様の犯罪を犯していたとの情報もあります。このような犯罪人が四英雄を名乗り、セイルーン王家ひいてはセイルーン国王の座を狙っている事態を憂慮し、我が主人ローエン様は国王陛下へのご報告を思い立った次第であります」

と、バカの背後にたたずむバカの部下が言った。会議用のセリフも覚えられんのか、あいつ。本気でバカだったんだ。

大臣達からざわめきが広がった。『やはり』とか『だから反対したんだ』のような声もある。俺の黒い噂をご存じの方は少なくないらしい。さきほどの手配書には、たまたま『殺人』は入ってなかったが、余所ではやっている。

俺を王家に加えるのは、犯罪者を王家に加える事を意味する。セイルーンの風評を落すだけではない、対外的に問題がありすぎるのだ。

「おまちなさい！」

アメリカがスクツ！と、立ち上がった。公式の場に合わせて、姫君らしいピンクのドレスを着ている。が、こんな事態だというのは、俺は、七五三の晴れ衣装のようだと思ってしまった。

「ゼルガデイスさんが、過去、悪の組織に操られ、悪の道に足を踏み入れてしまっていた事実は、既に説明したはずですよ！確かに、悪は悪！許すまじき犯罪は、とことん追及すべきですよ！けれども、悪人すべてを切り捨て、臭いものには蓋と逃げているは、悪事

に手を染めた人間の更正の道を奪ってしまいます！ 人間、誰でも過ちは犯すもの！ 大切なのは過ちを認め、正義に目覚め、更正する心なのです！」

正義になんか目覚めとらんど、俺は……

「しかし、姫様」

と、バカの部下はうすら笑いを浮かべた。

「犯罪者を王家に迎えては、セイルーンが国をあげて悪事に加担しているのではないかと、他国の心証を悪くします。セイルーンの信用問題に関わります」

「ゼルガデイスさんが正義に目覚めたことを、広く世にしらしめればいいではありませんか」

「おお、さすが姫様」

バカの部下はわざとらしく驚いてみせた。

「複雑怪奇にこじれた国交をいとも簡単に正常化できる自信がおりなのです。で、具体的な案は？」

……あるわけがない。アメリカが口にするのは、いつも正義に燃えた理想論ばかりだ。

ところが……

「もちろん、あります」

きつぱりと、アメリカが答えたのだ。

バカの部下はびっくりして目を丸め、口をパクパクさせた。

「それは……どんな？」

「時がきたら、話します」

「ですが、それでは」

「お黙りなさい！ わたしの言葉が信用できないのですか！」

アメリカはバカの部下を一喝した。俺の前でいつも見せるあっけらかーんとした顔とはまったく違う、気品あふれる顔で。

「私はゼルガデイスさんと結婚します」

アメリカは視線を、扉の前にたたずむ俺へと向けた。

「ゼルガデイスさんは、よこしまなる悪の手によって合成人間にさ

キメラ

れ、悪事を強要されました。けれども、心の気高さ、強さを失わず、最後には自分を取り戻したのです。こんな素晴らしい方、わたしは他には知りません。だから、結婚するのです」

俺に対してにつこりと微笑んでから、アメリカは大臣達を見渡した。

「けれども、私の結婚が不和の芽となり、セイルーンに暗雲をもたらすというのなら……」

深呼吸をした後、アメリカはきっぱりと言った。

「わたしは王位継承権を放棄します」

「！」

駄目だ！

「いかん！」

俺は声を張り上げた。

「俺の為に、そんな馬鹿なことはするな！」

「ゼルガデイスさん……」

アメリカは目をパチクリさせた。

「おまえはセイルーンには必要な人間だ。くだらん理由でセイルーンを離れるな。俺が……俺が消えればすむ問題だ」

「いいえ、違います」

アメリカは拳を握り締めた。

「とーさんがいる限り、そして、いずれねーさんが帰ってくれば、セイルーンの正義は揺るぎのないものとなります！ わたしがいなくても正義は守られます！ けれど、ゼルガデイスさんの花嫁になれるのは、たった一人！ 王位継承権よりも、わたしはゼルガデイスさんを選びます！」

「……馬鹿野郎」

あまりにもまぶしすぎて……

アメリカの顔が、まともに見られない。

「俺に……そんな価値などない」

「価値があるかないかは、わたしが決めることです。ゼルガデイス

さんは、わたしにとって最高に価値ある人です」

真顔で言うな……

人を見る目のない奴だ……まったく。

「姫様、どうかご冷静に……」

「セイルーンは姫様あつてこそ安泰で……」

大臣達はアメリカを囲み、なんとかなだめすかそうとしていた。ローエンのバカもその部下も、事態が思いがけぬ方向に転がってしまつたので、真っ白になって固まっていた。

俺は蜂の巣をつつついたような騒ぎの中、ただぼんやりとしていた。俺の小賢しいくらみがアメリカを窮地に陥れ、そのピンチの中で、尚、アメリカはアメリカらしく強く輝いているのだ。生涯、俺などでは、アメリカに勝てまい。

沈黙を守っていたフィル国王のもとに、隣室から現われたクロフエル侯が歩み寄り、その耳元に何かを囁いた。国王は頷き、つぶやいた。声は聞こえなかったが、唇の動きからすると「間に合ったか。すぐ通せ」と、言ったようだ。

まもなく。

カツ、カツ、カツ。

俺の背後の扉の先から、三つの靴音が近づいて来て、バーン！と、扉が開けられた。

「ちよーっと待ったあ！」

その派手な登場に、大臣達は度肝をぬかれて黙り、アメリカを目をきよとんとさせ、フィル国王は満足そうに頷いた。

リナだ。

ラナを左肩にのせたガウリイと、見るからに高官とわかる恰幅のいい親父を従えての登場だ。あの親父の服の刺繍……あの紋章は確か……

「アメリカ姫の花婿候補ゼルガデイス」グレイワーズについて、重大な情報を持って来たわ。まずは、××国のセイルーン駐在大使ドレント様のお話を伺ってもらいましょうか」

リナの背後から、恰幅のいい親父が進み出て、巻物をバツと広げた。

「ゼルガデイス・グレイワーズ殿に、この場をもって陳謝の意をお伝えする。約八年前のとある事件で、我が国はゼルガデイス殿に冤罪をかけ、手配書を配布した。しかし、その後の調べでゼルガデイス殿の罪が騒乱罪のみであった事実が確認され、且つ、ゼルガデイス殿が騒乱に關しての賠償金を即座に支払われていたにも関わらず、当方の都合で手配書の回収が非常に遅れもつした。ご迷惑をおかけして、たいへん申し訳ない」

嘘……だ。

放火も、強盗も、恐喝も、傷害も、騒乱も、建造物破壊も、皆、俺がやった。俺が手を下した。賠償金なんぞ知らん。払つたらん。

リナか？ リナが××国の法務大臣あたりを恐喝したか買収したかして、俺の手配書を取り下げさせたんだな。

リナと目が合うと、睨みつけられた。よけいなこと言つとぶん殴るぞ！ って感じた。

リナはにつこりと笑つて、××国の外交官に礼を言つと、再び歩み出て大臣達を見渡した。

「ゼルガデイスは品行方正な聖人君子ではありません。血氣盛んな若者ですから、ちよつとした騒動を各国で起こしています」

コホンと咳払いをし、

「しかあし！ ただの暴れん坊で終わらないのが彼の凄いところ！ サイラーグの消滅の大惨事、あ、最初の方です、あの恐ろしい事件は、まだみなさんもご記憶でしょう。あの事件の時は、アメリカ姫、フィル陛下もご活躍なさいましたが、このゼルガデイスも最後まで悪に屈せず闘い抜き、勝利を勝ち取る為に活躍したのです。そーですよ、陛下？」

「うむ、その通りだ」

フィル国王が力強く頷く。

うまい手だ。

国王が認めた以上、大臣達は、嘘だろ？ と、言えなくなる。

「次にサイラーグが崩壊する時も、悪の大魔族を倒す為に彼は立ち上がりました。外の世界が危機と知れば駆けつけて、彼は正義の為に戦いました。他にもマイナーな事件なのでご存じないかもしれませんが、赤眼の魔王^{ルビーアイ}シャブラニグドウの復活を阻止した勇者の中にも彼の名前はあります。つまり！ この世の平和の為に悪と戦い続けた彼の活躍が世に広がれば、彼の過去の過ち……とるにたらぬつまらない犯罪なんて霞んでしまうでしょう」

おおと大臣達は歓声をあげた。

「ゼルガデイスは正義のヒトなのです！ それと言うのも」

リナは胸元から巻物を取り出し、ジャジャーンとばかりに広げた。
なんだ？ あれは……
げっ！

「ゼルガデイスの家系図です。ここ！ ここ！ ここにご注目を！
ゼルガデイスの家系からは、なんと、あの超有名な大賢者、赤法師レゾが出ているのです！」

大臣達はどよめいた。

確かに……嘘ではない。俺とレゾは血縁だ。だが、俺を^{キメラ}合成人間にした大悪党も、あいつなんだぞ。ま、外面のいいあの野郎は、死後の今も、名声を欲しいままにしているが……

大臣達はレゾ様の縁者なら間違いないとか、ゼルガデイス殿のサーガを至急作らせ世に広めましようとか、騒いでいた。

もう誰も、アメリカと俺の結婚には反対していない。

それどころか俺は「姫の身を案じて身を引こうとした、無欲な善人」と大臣達に誤解されたようだ。「権力欲にまみれた若者が多い中、稀有なお方だ」と、わざわざ俺の前まで褒めちぎりに来る奴まいた。

今後の方針が決まり、国王から許可をもらい、大臣達はほくほくと退出した。バカとその部下も、すごすごと引き下がって行った。
部屋に残ったのは、国王とクロフェル侯、アメリカとリナ一家と、

俺だけだ。

リナが俺のそばに寄って来て、ニツと笑った。

「誤解しないでね。あんたの為にやったんじゃないから。フィルさんから、結婚の最後の障害を取り除いてくれて依頼されただけよ。あんたの手配書、四年の間にできるだけ無効にしといたんだけど、××国のは、たまたま見過ごしてたのよ。でも、もう大丈夫。あんたは、何処へ行っても、もう極悪非道な指名手配犯じゃなく、ケチな騒動をあっちこっちで起こして回ったおっちょこちょいな若者って事になってるから」

「……チツ、余計な事を」

強がりが漏れた。

リナが……いや、騒動を予想してリナに依頼したフィル国王がいなければ、アメリカは俺のせいで王位継承権を失いかねなかった。礼を言うべきなのだろうが、素直な気持ちを口にできなかった。

リナは俺をほつといて、フィル国王のもとへ走って行った。

三才の娘を抱えて東奔西走したのよ、大変だったんだから、割増料金はこれぐらいかな？ と、言うリナに対し、うおおお、高すぎる、こんなもんでどうじゃ？ と、フィル国王。ええー、お祝いごと決まったんだし、ご祝儀価格で色をつけてよ、と切り返すリナ。

二人は延々とそんなことをやっていた。

「あの……ゼルガデイスさん」

俺の右手の袖を握りながら、アメリカがアメリカらしくないシュンとした顔でうつむいていた。

「お話があるんですが……ちょっといいですか？」

アメリカは会議室横の小部屋まで、俺をひっぱって行った。出席者の控え室かなんかだろう。

アメリカは正面から俺を見つめ、深々と頭を下げた。

「ごめんなさい！ ゼルガデイスさん！」

え？

顔をあげたアメリアの瞳は、うるうると潤んでいた。今にも声をあげて泣き出しそうな顔だ。さっきのバカの部下を黙らせた威厳は、微塵もない。赤ん坊みたいな顔だ。

「わたし……ゼルガデイスさんと一緒になれると思って……舞い上がっちゃって……自分のことばっか夢中になっちゃって……ゼルガデイスさんの気持ち、全然、考えてませんでした。ごめんなさい！許してください！」

「なんの……ことだ？」

「さつき、ガウリイさんに言われたんです」

じわ〜と目から涙をあふれさせながら、アメリアはしゃくりあげた。

「『ゼルはずっと一人で生きてきたんだ。家族ができるっただけで大変化なのに、王族の義務だ義理だっている押しつけると潰れちまうぞ』って。言われてみれば、このところ、ずっと、ゼルガデイスさん、物思いに沈んでいたし、つらそうだったし、わたしと目を合わそうとしなかったし」

いや、それは……俺にやましいところがあったからだ。

「わたしの義務とか義理とか押しつけて、ゼルガデイスさんをがんじがらめにしちゃってごめんなさい！ 式なんかほんとーは、どーでもいいんです！ やめましょ！ わたし、ゼルガデイスさんのお嫁さんになれば、それだけで幸せなんですから！」

「いや、それは……駄目だ」

「え？」

「俺にはよくわからんのだが……その」

ええい、くそ！ なんて言えばいいんだ！

「えっと、あの、なんだな、女つてのは、花嫁衣裳に憧れるものなんだろ？ 一生一度のことだし、悔いが残らんよう、着た方がよろう」

！

な、なにを言ってるんだ、俺は！ これじゃ、結婚をOKしたも同然じゃないか！

アメリカは照れたように笑い、目元を拭った。

「ありがとう、ゼルガデイスさん」

「いや、その……」

「じゃ、お言葉に甘えて、赤の竜神の神殿の神前結婚式だけやらせてください。わたしの花嫁姿、とーさんも見たいだろうし」

「そ、そう、だな」

「パレードとか舞踏会とかは、中止します。その方がいいでしょ？」

「あ、ああ」

「ただ、一回だけお披露目の場をもうけさせてください。他国の要人にご挨拶しなければいけないし、国民にも顔を見せなきゃ……」。

でも、ゼルガデイスさんが、どうしても嫌というのなら」

「一回ぐらいなら……まあ」

「えっ！ ほんとーですか！ ありがとうございます！」

アメリカがひしつと抱きついてきた。

ミルクのような甘い香りがする。

やわらかな胸の感触に戸惑いながらも、俺は、この子に捕まったんだと自覚した。

だが……悪くはない。

多分、一人で生きるよりも、こいつと一緒にいた方が俺は多少はマシな人間になれるだろう。こいつの愛と正義の力（笑い）によって……

……確かに、言った。

……一回なら、お披露目に出てもいいと。

……だが……

「これ、媚殿！　そこは右ターンした後、右手をあげて決めポーズ！　『我等が前に悪が栄えたためしなし！』と力強く叫ぶ！　照れてはいかん！」

「そーです、ゼルガデイスさん！　左ターンして左手をあげるわたしに合わせてください！　二人の息がバッチリ合っているところを、広く世に知らしめるんです！」

「えっとお、オレは横で何するんだっけ？」

「だーかーらー、ガウリイさんはゼルガデイスさんの隣で片膝をついて、あ、立てるのは右膝ですよ、ゼルガデイスさんに開いた両手を向ける。そう、持ち上げるみたいに。とーさんがわたしの横でやつてるのの反対ポーズです」

……なぜ、お披露目がヒーロー・ショーなんだ？

……これなら舞踏会の方がなんぼもマシだ。

「ゼルガデイスさんが正義に目覚めたことを！　正義の使徒であることを！　広く世に知らしめるには、この方法しかありません！」

……いや、他にも方法はあると思うぞ。

今、王宮の前には二千人は収容できる仮劇場が建設中だ。各国のお歴々、あっちこっちの神官のお偉いさん、それに正義を愛するセイローン国民を招き、俺とアメリカ、フィル国王とガウリイのヒーロー・ショーを見せるのだ……そうだ。

「とーさん、がんばれ！」

リハーサルの真つ最中、観客席からラナの無邪気な声がかかった。
「素敵よおん、頑張つてねー、ガウリイ、ゼルウ」

観客席から邪気いっぱいのリナの声もかった。

リナの奴「あたし、最近、吐き気がしてえ。二人目ができたのかも。ちよつと安静にしてなきやあ」とか言つて、ヒーロー・シヨーの出演者の枠から外れたのだ。二人目だとおゝ嘘つけ！

「ゼルガデイスさん！ その決めセリフは『愛、夢、友情、そして、正義の名にかけて！』です。間違えないでください！」

俺の名はゼルガデイスⅡグレイワーズ（結婚後は入り婿になるから、この名字を名乗るのも、後、一週間だな）。残酷な魔剣士だ。

本当の自分を求めて、無限の荒野を彷徨い続ける、永遠の旅人だ。

……だつたはずだ。

……少なくとも、三週間前までは、そうだったんだっ！

アメリカはアメリカらしく（後書き）

「結婚狂奏曲」 E N D

つづいて「邂逅」。9月27日にアップします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0037x/>

結婚狂奏曲

2011年9月26日15時19分発行